

地獄街道

海野十三

青空文庫

銀座の舗道ほどうから、足を踏みはずしてタツタ百メートルばかり行くと、そこに吃驚びっくりするほどの見窄みすぼらしい門があつた。

「おお、此処ここだ——」

と辻つじ永なががステッキを揚あげて、後から跟ついてくる私に注意を与えた。

「ム——」

まるで地酒じざけを作る田舎家いなかやについている形ばかりの門と選ぶとこ

ろがなかつた。

「さア、入つてみよう」

辻永は麦藁帽子むぎわらぼうしをヒョイと取つて門衛に挨拶あいさつをすると、スタコラ足を早めていった。私も彼の後から急いだけれど、レールなどが矢鱈やたらに敷きまわしてあつて、思うように歩けなかつた。そして辻永の姿を見失つてしまった。

私は探偵小説家だ。辻永は私立探偵だつた。

だから二人は知り合つてから、まだ一年と経たないのに十年來の知己ちきよりも親しく見えた。それはどっちも探偵趣味に生くる者同士だつたからであつた。しかし正直のところ辻永は私よりもずつと頭脳あたまがよかつた。彼は私を事件にひっぱりだしては、頭脳の

働きについて挑戦するのを好んだ。それは彼の悪癖あくへきだと気にか
けまいとするが、時には何か深い企たくらみでもあるのではないかと思
うことさえあつた。

「オーイ。こつちだア——」

思いがけない方角から、辻永の声がした。オヤオヤと思つて、
声のする方に近づいてゆくと一つの古ぼけた建物があつた。それ
をひよいと曲まがると、イキナリ眼がんぜん前に展ひろげられた異常な風景！

おびただ

夥おびただしい荷物の山。まったく夥おびただしい荷物の山だつた。山とは恐ら
くこれほど物が積みあげられているのでなければ、山と名付けら
れまい。——さすがは大貨物だいかもつえき駅として知られるSこうない駅の構内だ
つた。

辻永は大きな木箱きばこの山の側に立って、鼻を打ちつけんばかりに眼をすり寄せている。早くも彼氏、何物かを掴つかんだ様子だ。小説家と違って本当の探偵だけに、いつでも掴むのがうまい。あまりうまいので、私はときどき自分が小説家たることを忘れて彼の手し腕ゆわんに嫉妬しつとを感じるほどだ。

「これだこれだ山野君やまの」と彼は私の名を思わず大きく叫んだ。

「例の箱がいつ何処どこで作られたんだかすつかり判つちまつたよ。

第一回の箱は七月四日の製造だ。第二回目のは七月十八日の製造だ。そして第三回目のは今から一週間前、実に八月八日の製造だ。ということが判つたよ」

「そりやどうして？」私はすつかり駭おどろいた。

「ナニこれは殆んど努力で判ったのさ。今日は箱の山がどんな形に、どんな数量を積み重ねてあるかを知りたかったのだ。あとは発送簿はっそうぼの数量を逆に検しらべてゆくと、あの箱を積んだ日、随したがつてあれを製造した日がわかるといふ順序なんだ」

よくは呑みこめなかつたけれど、やっぱり頭脳さきの冴さえた辻永だと感心した。

例の箱とは、前後三回に互わたつて発見された有名なる箱詰屍はこづめしたい体事件の、その箱のことなのである。

細かいことは省略するが、その三つの屍体はすべて此この貨物積置場に積まれてあつたビール箱の中から発見されたのだつた。その箱は人間の身体がゆっくり入りるばかりか、ビールがその隙間すきまに

五ダースも入ろうという大量入りの木箱だった。

事件を並べてみると、不思議な共通点があった。第一に、屍体ぬしの主はいずれも皆、若いサラリーマンや学窓がくそうを出たばかりの人達だった。第二にいずれも東京市内の住人じゆうにんだったのも、大して不思議でないとしても、不思議は不思議である。但しただ三人の住所は近所ではなくバラバラであった。第三に三人の屍体は同様の打撲傷だぼくしょうや擦過傷さつかししょうに蔽おおわれていたが、別にピストルを射ちこんだ跡もなければ、刃物はもので抉えぐった様子もない。もう一つ第四に、三人とも殺されるほどの事情を一向持っていなかったということ。それからこれは附つけ足りただが、三人が三名とも名刺入れをもつていて、直ぐに身許みもとが判明したそうさ。

ビール会社では、こんな青年の屍体が、どうして箱の中に入っていたか判らないと弁明べんめいした。その工場の内部を隅々まで調べてみたが、そんな青年達の忍びこんでいたような形跡けいせきは一向見当らなかつた。ビール瓶に藁筒わらづつを被かぶして自動的に箱につめる大きな器械がある。これは昼となく夜となく二十四時間ぶつとおしで運転しているもので停めたことはないものだが、それをワザワザ停めても調べてみた。その結果もなんの得るところが無かつた。

事件はそのまま迷宮めいきゆうへ入った——というのが箱詰屍体事件のあらましである。

2

「ビール会社へ行ってみようよ」

辻永はそういうのが早いか、駅の門の方へスタスタ歩きだした。

私は依然^{いぜん}お伴^{とも}である。

円タクを値切って八十銭出した距離に、そのビール会社の雲をつくような高い建物があつた。古い煉瓦積みの壁^{へき}体^{たい}には夕陽が燃え立つように当つていた。遥^{はる}かな屋根の上には、風受けの翼^{つばさ}をひろげた太い煙^{えん}筒^{とつ}が、中世紀の騎士の化物のような恰好をして

てんくう 天空を支えているのであつた。その高い窓へ、地上に積んだ石炭を搬びこむらしい吊り籠が、適當の間隔を保つて一イ二ウ三イ……相當の数、ブラブラ揺れながら動いてゆく。

待つほどもなく、私たちは工場の中へ案内せられた。特に見たいと思つたのは、矢張りビール瓶を自動的に箱につめこむ工場だつた。まったくそれは実に大仕掛けの機械だつた。一つの大きい軸がモートルに接がるベルトで廻されると、廻転が次の軸に移つて、また別のベルトが廻り、そのベルトは又更に次の機構を動かして、それが板を切るべきは切り、釘をうつべきはうち、ビールを詰め込むべきは詰めこんで、一番出口に近いところにすつかり納つたビールの大箱が現われるのだつた。

それをすぐにトロツコが待っていて、外へ運び去る。まことに不^ぶ精^{しょう}きわまることながら、便利この上もないメカニズムだった。「実に恐ろしい器械群だと君は思わんか」

と辻永が感歎の声をあげた。

「うむ、たった一つのスイッチを入れたばかりで、こんな巨人のような器械が運転を始め、そして千^{せん}手^{じゆ}観^{かんの}音^{のん}も及ばないような仕事を一時にやってのけるなんて……」

「イヤそれより恐ろしいのは、この馬鹿正直な器械たちのやることだ。もしこのベルトと歯車との間に、間違つて他のものが飛びこんだとしても、器械は顔色一つ変えることなく、ビール瓶と木箱と同じに扱って仕舞^{しま}うことだろう」

辻永は大きく嘆息たんそくをした。

「すると君は、あの不幸な青年たちが、この器械にかかったというのかネ」

「懸ることもあるだろうと思う程度だ。断定はしない。しかし……」と彼は急に眉を顰しかめて窓外を見た。「若もしこの窓から人間が入って来ることがありとすればだネ、これはもつとハツキりする」
「なにかそんな手懸りになるものがあるか知ら？」

私は窓から首をつき出して外を見た。

「呀あッ！」

その窓から見上げた拍子ひょうしに、石炭の入った吊り籠がユラリユラリと頭の上を昇ってゆくのが見えた。

「どうした」と辻永は私の背について窓外そうがいを見た。「オヤ、偶然かも知れないが、面白いものがあるネ。ここに通風窓つうふうまどがあつて窓の外へ一メートルも出ている。ホラ見給え、家に近い方の隅すみつこに、小さい石炭の粉がすこし溜っているじゃないか」

「なるほど、君の眼は早いな」

「だからネ、もし石炭の吊り籠の上に人間が乗っていて、それが下へ落ちると、地上へは落ちないでこの通風窓にひっかかることだろう。すると勢いでスルスルとこの室に滑りこんでくることが想像できる。滑りこんだが最後、この恐ろしい器械群だ」

「吊り籠に若し人間が乗っていたとしても、この窓にばかり降つてくるなどとは考えられない」

「うん。ところがアレを見給え」と辻永は窓から半身を乗り出して頭上を指した。「あすこのところに腕うでがね金が門のような形になって突き出ているのだ。あの吊り籠が石炭だけを積んでいたのは、苦もなくあの下をくぐる事が出来るが、もし長い人間の身体が載っていたとしたら、あの腕金つかにたちま問えて忽ち下へ墜ちてくるだろう」

「なるほど、そうなっているネ」と私はいよいよ友人の炯眼けいがんに駭おどろかされた。

「しかしもう一つ考えなければならぬ条件は、吊り籠のに載のついていた人間は氣を失っていたということだ」

「ほほう」

「気が確かならば、オメオメこんな上まで搬はこばれて来るわけはないし、若もし身体が縛りつけられてあつたとしたら、下へは墜ちることが出来なからう。さア、とにかくあのケーブルが怪あやしいとなると、吊り籠かごの先生、どこから人間の身体を積んできたかという問題だ。下へ降りて石炭貯蔵場まで行ってみようよ」

3

下へ降りてみるとなるほど石炭の山の中を、吊り籠かごが通る度たび

とに、籠かご一杯の石炭を詰めこんで、上に昇つてゆく。辻永は石炭庫さんこの周りまわをしきりに探していたが、

「いいものを見付けたぞ」と辻永はいよいよ元気になった。「ハテこれは綿わたやの広告だ。それも塀へいに貼つてあるのを引き剥はいだものらしい」

辻永は石炭庫の傍そばから、真黒まっくろになつた紙片を拾い出して、私に示した。

「塀へいというと——」

「塀へいというと、あれだ。あの黒い塀だツ。あの塀に、これが貼つてあつたのだ」

石炭庫の向うに、大分痛んだ塀が見える。辻永は身を翻ひるがえすと駈

け出した。機械体操をするように、彼はヒョイと塀に手をかける
とヒラリと身体を塀の上にのせた。

「これは大変なところだぞ」

彼は声をかえておどろ駭いた。そして俄かに身体を浮かすと、ドツと
地上に飛び下りた。

「オイどうしたんだ」

「イヤこれは実に大変な場所だよ、君」

そういつて辻永は、こころもち心持顔色をあお蒼くして説明をした。それ

によると、彼がいまよじのぼった塀の外は「ユダヤ横よこちよう丁」と

いう俗称をもつて或る方面には聞えている場所だった。それは通
りぬけのできる三丁あまりの横丁にすぎなかったが、ユダヤ秘ひみつ

密結社けつしゃの入口があつた。なんでも夜中の或る時刻に団員をその入口へ案内してくれる機関があるらしかったが、その様子は分ぶん明めいでない。多分団員の服装か顔かに目印めじるしをつけて、その団員が通るところを家の中から見ている。ソレ来たというので、スイツチかなにかを入ると、地面がパツと二つに割れて、団員の身体を吞んでしまう——といったやり方で、団員を結社本部へ導みちびいているのじやないかという話だった。なにしろどうにも手をつけかねるユダヤ結社のことだった。知る人ばかりは知っていて、其その不気味ぶきみな底の知れない恐怖に戦慄せんりつをしていたわけだった。その「ユダヤ横丁」がすぐ堀の外になっているというので、これは辻永が顔色をかえるのも無理ではないことだと思つた。

「これはことによると——」と辻永は云い^い澱^{よど}んだ末^{すえ}「例の三人の青年はユダヤ結社のものにやつつけられたのじゃないかと思う」「うむ。しかし屍^{したい}体には短刀の跡もなかったじゃないか」と私はわかりきったことをわざと訊^{たず}ねた。

「僕ならこう考える。青年たちはこの横丁をとおりかかって誤つて団員と間違えられた。そのとき結社の内部を青年たちに見られたものだから、これを死刑にしたのだ。方法は簡単だ。散^{さん}々^{ざん}撲^{なぐ}つて気絶させ、それからあの塀を越えてあの石炭の吊り籠に載せる。それだけでよいのだ。あとはあの殺人器械がドンドン片づけてくれる。こここのところを見給え。奴等の乗り越えてきたあとがあるぜ」

そういつて辻永は、まだ塀の新しい裂け傷きずや、跳ねかかった泥ど跡あとを指した。

「青年たちはどうしてこの横丁へなぞ入ってきたのだろう」私は不審に思った。

「そいつはこれから探すのだ」

辻永の探偵眼に圧倒された気味で、私はそのうしろについてユダヤ横丁を通りぬけた。まだ空は薄明るかったが、いい気持はしなかった。

辻永は左右へ眼を配りながら、黙々もくもくと歩いてゆく。

そのうちに、あたりはいよいよ暗くなってきた。どこからかピストルの弾丸たまが風をきって飛んできそうな気がしてならぬ。わが

友はその中を恐れもせず、三度ユダヤ横丁を徘徊した。

「オヤツ——」

私は駭おどろきを思わず声に出した。辻永が急に活発に歩きだしたのだ。どうやら何か又新しい手懸てがかりを掴つかんだものらしい。

その辻永が再びゆっくりとした歩調に返ったのは、ユダヤ横丁をとおり抜けた先に沢山たくさんに押並んだ小さい二階家にかいやの前通りだった。歩いてゆくと、とある家の薄暗い軒下に一人の女が立っていた。

まるまると肥った色の白そうな女だった。年の頃は十八か九であろう。透きとおるような薄物うすもののワンピースで。——向うではこっちを急に見つけた様子をして、ものなれたウインクを送った。

「上ろう。いいか」

辻永は私の耳許みみもとに早口ささやで囁いた。しかし私は辻永のような実践つせん的度胸てききょうに欠けていた。

「やめちやいけないか」

「じゃ斯こうしろ」辻永はやや声を震ふるわせて云った。

「バー・カナリヤで待っている」

バー・カナリヤは銀座裏にある小さい酒場だった。私たちが友情をもつようになる前から二人は別々に客だったのだ。随したがって銀座方面へ出るたびに、二人は手に手をとってカナリヤの小さい扉ドアを押したものだ。

ふりかえってみると、桜さくら坊ぼうのような例の女は、白い腕をしなやかに辻永の腰に廻めぐして艶えん然ぜんと笑っていた。そして二人の姿は

吸いこまれるように格子こうしの中に消えてしまった。

4

バー・カナリヤで一時間半も待ったろうか。随分永いこと待たされたものだが、私にとつてはそう退たい屈くつではなかつた。それはミチ子を傍そばにひきよせて飽あくことを知らぬ楽しい物語をくりひろげていたせいであつた。出来るなら辻永が永遠にこのバー・カナリヤに現われないことを冀こいねがつた。辻永が探偵に夢中になっている

間にこの女を誘い出してどこかへ隠れてやろうかという謀叛気も
出た。それほど私は、辻永のキビキビした探偵ぶりにどうい
うものか気が滅入めいりいってくるのであつた。

そこへ辻永がシェパードのように勢いきおいよく飛びこんで来た。

「大勝利。大勝利」

彼は躍おどり出したいのを強しいて泳こらえているらしく見えた。

「おいミチ子。今夜は奢おごつてやるぞ。さア祝杯だ。山野やまのには何か
うまいカクテルを作つてやれ。僕は珍ちんしゆ酒コンコドスを一つ盛り
合わせてコンコドス・カクテルとゆくかな」

「コンコドス？ およしなさい。アレ飲むとよくないことよ。そ
れに辻永さん、今夜は顔色がたいへん悪いわよ。どうかして？」

なるほど辻永の顔色のわるいことは前から気がついていた。変に黄色っぽいのである。

「ナーニ、今日は疲れたのと、喜びと一緒に来たせいなんだよ。

——早くもって来い」

「じゃ辻永さんはコンコードス。山野さんはクイーン・ノブ・ナイルがよかない」ミチ子が向うへ行つてしまうと、辻永は待ちかねたように、かいちゆう懐中から手帖を出した。それには小さい文字で、いくつもの項こうもく目わけにして書き並べてあつた。

「君。ちよつとこのところを読んで見給え」辻永は鉛筆のお尻で、そこに書き並べられたひょうだい標題を指した。

そこには次のようなことが書いてあつた。

——○ガールの家（夜中に客が居なくなつてしまつたという不思議な事件が三度あつたという）

「これは？」と私は訊ねた。

「さっきの女のうちに、箱詰はこづめになつた青年が三人とも泊つたことが判つた。三人とも夜中にいなくなつたので覚えてゐるそうだと遺留品いりゆうひんも出て来た」

「ほほう」

「ところがその青年たちは、申し合わせたように近所の薬屋で、かゆみ止めどの薬を買つて身体に塗つたそうだ」

「三人が三人ともかい」

「そうなのだ。三人が三人ともだ。それがこの薬屋でかゆみ止め

の薬を買って、身体に塗るしき。女の話では、なんでもその前は全身かゆがって死ぬように藻もがいていたそうだ」

「どうしてそんなにかゆがる客をわざわざ取ったのだ」

「イヤそれは、○かゆい（家につくちよつと前から始まる）——
なんで、始めからかゆがっていた訳じゃないのだ」

「じやどこかで拾ってきた客なのだネ」

「これだ。○ストリート・ガール（銀座で引っぱられる）——つ
まり銀座から、あの場所まで引張ってゆくうちに、かゆくなった
のだ」

「どうして、かゆくなったのだ」

「それは後から話すよ」

ミチ子がグラスを載せてやってきた。

「オイ煙草を買って来て呉れ。それからシャンパンの盃さかずきをあげるから、冷ひやして用意しといて呉れ」

辻永はミチ子に向つてたてつづけに用を云いつけた。

「まあ景気がいいのネ」

とミチ子はグラスを二人にすすめると向うへいった。

「さア一杯やろうよ」

「ウン」

「どーだ、これを飲んでみないか。君の口にはよく合うと思うがな」

と彼は自分のところへ置かれた盃をこつちへ薦すすめようとして、

又別の声をあげた。

「オヤオヤ。ミチ子の先生、今夜はどうかしているぞ。コンコドスを僕のところへ置かないで君の前へちやんと置いているじやないか。莫迦ぼかに手廻まわしがいいなア」

そういつて辻永は二つのグラスを横から眺ながめた。私の眼にうつったものは、辻永のグラスの黄色い液体、私のグラスの透明な液体であつた。

「コンコドスつて無色透明むしよくとうめいなのかい」

私は変な酒を飲まされてはかなわんと思つて念のために訊たずねた。

「ちがうよちがうよ。コンコドスは黄色いレモン水のようなやつさ。それ、そのとおり……」と彼は私の前の無色透明の酒を指し

た。

「その方のじゃないか」と私は彼のグラスに入っている黄色い酒を指した。

「イヤ、こんなにかつしよく褐色かっしょくがかってはいないよ」と彼は打ち消して、

「さア乾杯だ」

彼はキュツとグラスから黄色い液体を飲み乾ほした。私は狐に鼻をつままれているような気がしたが、アルコールときては目がなないので、目の前の無色のカクテルを（彼は黄色だというのを）グツと一と息に飲んだ。

「それでいい。それでいい。大いに愉快だ」

5

辻永は大変興奮してきたようだった。この分では今に酔払つて前後ぜんごがわからなくなるのであろう。私は今のうちに、先刻せんこくの話を聞いて置こうと考えた。

「あの話ネ、かゆくならないというのは、どういうわけなのだ」

「かゆくならないわけかい。ウン、話をしてやろう。——西洋に不思議な酒さけづく作りがある。それは禁止の酒を作つては、高価しやですき者

に売りつけるのだ。法網ほうもうをくぐるために、酒瓶さかびんの如きも普通のウイスキーの壇壇に入れ、ただレットルの上に、玄人くろうとでなければ判らない目印めじるしを入れてある。こうした妖酒ようしゆのあることは君にも判るだろう」

「……」私は黙うなずつて肯うなずいた。それは例の媚薬びやくなどを入れた密造酒のことを指すのであろう。

「これは大変に高価なもので、到底とうてい日本などには入いつて来ないわけのものだが、だが一本だけ間違まちがつてこの銀座ぎんざに来ているのだ。或るバーの棚たなの或る一隅いちぐうにあるんだ。ところがそのバーの主人も、その酒の本当の効目ききめというものを知らないのだから可笑おかしな話わじやないか」

「それでは若しや……」

「まあ聞けよ」と辻永は私を遮った。さえぎ「その酒は滅多めったに客に売らないのだ。だが特別のお客に売ることがあるし、また間違つて売る場合もある。それはバーの主人がときどき休む月曜日の夜に、ふな不馴れなマダムが時々こいつを客に飲ませるのだ。勿論もちろんマダムはそんな妖酒とは知らず、安ウイスキーだと思つて使つてしまうのだ。——とところでこの酒を飲まれたが最後大変なことになる」

「ナニ大変なこと!」

「そうだ。大変も大変だ、自分の身体が箱詰めはこづになつてしまふんだ。無論むろん息の根はない。再び陽の光は仰げあおなくなるのだ」

「オイ辻永。その洋酒の名を早く云つてしまえよ」と私は卓子テーブル

から立ち上った。

「まあ鎮まれ^{しず}。鎮まれというに」彼はいよいよ赤とも黄とも区別のつかぬ顔色になつて、眼を輝かせた。「おれ様の探偵眼^{たんでいがん}の鋭さについて君は駭^{おどろ}かないのか。いいかね。その妖酒を飲んで例のバーを出るとフラフラと歩き出すころ一時に効目^{ききめ}が現れてくるのだ。まず第一に尿意^{にょうい}を催^{もよお}す。第二に怪しい興奮にどうにもしきれなくなる。ところでそのバーを出てから尿意を催すと、どこかで始末をつけねばならぬが、適当なところがない。どこかで——と考えると、頭に浮かんでくるのは、その直ぐ^す先の川つぷちだ。その川つぷちへ行つて用を足す。ところがその辺に桜^{さくら}坊^{ぼう}という例のストリート・ガールが網を張っているのだ。これはカフエ崩^{くず}

れの青年たちを目当てのガールなのだが、たまたまバー・カナリヤから出て来た彼の妖酒に酔いしれたお客さんだとして差聞えない。客の方では差聞えないどころかもう半分気が変になっている。だから桜ン坊の捕虜ほりよになって、円タクを拾うと、例の女の家の方面へ飛ぶのだ。そのうちに、又々妖しの酒の反応が現れて、こんどは全身がかゆくなる。かゆくて苦しみ出すころ、自動車は彼女の家の近くに来ている。隠れ家をくらすために家の近所で降りて、あとはお歩ひろいだ。しかし何分にもかゆくて藻掻もがきだす。そこであの近所にある一軒の薬屋を叩き起して、かゆみ止めの薬を売って貰う。——どうだ、この先はどこへ続いていると思う。「いや、それはあまりに独断どくだんすぎる筋道すじみちだと思う」私は最初

のうちは彼の鋭い探偵眼に酔わされていたような気持だったが、話を訊きいているうちに、なんだかあまりにうまく組立てられているところが気になった。

「独想ではない、げんぜん 嚴然たる事実なのだ、いいか」と辻永はあっぱ 圧迫くするような口調で云った。「そのかゆみ止めの薬が又大変な

薬で、かゆみを止めはするけれど、例の妖酒に対して副作用を生じるのだ。その結果夜中になって、その男をさくらぼう 桜ん坊の寢床から脱け出させる。うつつ まぼろし 現とも幻ともなく彼は服を着て、家の外にとび出すのだ。ちよつと むゆうびようしや 一寸夢遊病者のようになる」

「まさか——」

「事実なんだから仕方がない。その擬似ぎじ夢遊病者はフラフラとさ

まよい出でて、必ず例のユダヤ横丁に迷いこむ」

「それは偶然だろう」

「イヤ地形ちけいがユダヤ横丁へ引張りこむのだ。あとは簡単だ。あの夢遊病者のような歩き方が、団員の認識にんしき手段しゆだんなのだ。夢遊病者がやって来た。それ団員だといって、その男を本部へ引張りこむ。その上で尋ねてみると、どうも様子がおかしい。遂ついにに正体が露見ろけんするが、結社の本部を知られてはもう生いかして置けぬということになる。やつつけられて気を失ったところを、黒堀くろべいの向うへ投げこみあの吊り籠かごに載せて、ギリギリとビール会社の高い窓へ送る。あとは器械かぎに自然まに捲きこまれて息の根も止とまれば、屍体も箱詰めになつて、ビールと一緒に積み出される——」

「そんな歯車仕掛けのようになまくゆくものか。行けば奇蹟だ」
きせき

「奇蹟が三人の犠牲者を作るものか。ゆくかゆかないか。第四番目の犠牲者はもう出発を始めているのだ」

「なに？」

「考えても見給え。みたま例の妖酒から始まって、川つぶち、薬屋、ガ

ールの家、ユダヤ横丁、黒堀くろべい、クレーンと吊り籠かご、ビール工場

の高窓、箱詰め器械、それかち貨物駅と、これだけのものは次から次へとつながっているのだ。切迫せつぱくした尿意と慾情よくじようとかゆ

みと夢遊むゆうと地形とユダヤ横丁の掟おきてと動くクレーンと動く箱詰め器械と、これだけのものが長いトンネルのように繋がつながっている。ト

ンネルの入口はあの妖酒で、出口はビール箱だ。入口を入ったが

最後、箱詰め屍体になるまで逃げることはできないのだ。なんと恐ろしいことではないか」

6

私にもだんだんと辻永の語る恐ろしさが判ってきた。ゾツとする戦慄せんりつが背筋へ忍びよる——。

「この明るい東京の真ん中に、あのバーから始まってビール会社に続くこんな恐ろしい街道かいどうがあるのだ。それは死に至る街道だ。

地獄へゆく街道だ。これでも君は、おれ様の探偵眼を疑うか」と
辻永は虹にじのような気焰きえんを吐はいた。

私はすっかり自信がなくなつた。顔面がんめんは紙のように白くなつ
ていたであろう。手はワナワナと震ふるえてきた。

「もう判つた。君はミチ子のことで、この僕をあの恐ろしい地獄
街道へ送ろうというのだネ。さつき僕に飲ませた酒は、あの妖し
い酒なんだろう。そうに違ちがはない」

私はもう坐すわつても立つても居られなかつた。それはミチ子をめ
ぐる彼と私との暗闘あんとうが最後の場面ばうへ抛なり出されたのだ。断然だんぜん
たる敵意であつた。砲弾ぱうだんのような悪意だつた。

「はッはッはッ」と辻永は軽く笑つた。「まア落着いたがいいだ

ろう。あの酒は僕が飲ませたわけではなく、もともと君の前にミチ子が持つてきたのを、君がとりあげて飲み乾したただけのものじゃないか。僕がなにを知るものかネ。唯、^{ただ}地獄街道の道案内を聞かせてやっただけじゃないか。最後の注意をするが、もうソロソロ^{もよお}口催してくるから、助かりたかつたら……」

と、そこまで云つたとき、辻永は襲^{おそ}われた様^{よう}に声を嚙^のんでガツと眼を剥^むいた。そして椅子からピンと立ち上つたが、痛そうな顔をして腰をかがめて下腹をおさえ、急いで手洗室の方へ駈け出した。

「戸をあけてくれ。あけてくれ」

「^{あなた}貴方、ちよつとお待ちなすつて」とその日は月曜だというのに

珍らしくいつものように出ていた主人が駭おどろいて駈けつけた。「唯今お客さまがお使いになつていますから、しばらく、しばらくお待ち下さい。しばらくどうぞ」

「ぎやーツ」主人に遮さえぎられて、辻永は獣けもののような声をあげた。これがあの沈着な辻永とはどうして思えよう。彼はクルリとふりむくと、今度は表おもて戸を蹴破けやぶるようにしてサツと外へ飛び出した。私には何もかも判った。実に辻永は例の妖酒ようしゆを自分が飲んでしまったのだ。

「オイ待て、辻永」私も続いて戸外にとび出した。もう十二時にももない街はヒツソリと静かだった。辻永の姿はと見ると、向うの軒灯けんとうの下に転ころがるように駈けている黒い影がそうであろうと

思われた。私は彼の名を呼びながら追い駈けたがとても追いつけなかつた。

彼の話にある川つぷちを方々探したが見えない。桜ン坊も見当らない。探し疲れて橋の欄らんかん干かんに身を凭もたせかけた。もう時間はかなり経っているのにと心配していると、そこへ一台の自動車が風のように現われて、サツと通りすぎた。

「呀あッ！ 辻永つじながッ」

私は車内に、たしかに辻永の姿を認めた。彼の傍かたわらには確かにあの桜ン坊というガールがピッタリと倚よりそつていた。私は路の真中まで駈け出したが、もう間に合わなかつた。どうやら私は違つた側の川つぷちを探していたものらしい。

そこへ向うからパタパタと一人の女が近づいてきた。私の方へ向ってくるようだ。私はギョツとした。例のガールでもあつて、そして矢張り私があの妖酒を飲まされていたのであつたら、ああ其の恐るべき先は……。

「山野さん。あの人見付かつて」

それはミチ子だった。私はすこし安心した。

「駄目だった」

「あの人、黄痘おうだんだったようネ」

「黄痘！ 黄痘というと、なんでも彼かでも黄色に見える病氣だネ」

「そうよ」

「それで判った。僕のグラスの無色の酒を黄色のコンコードスと見み

あやま
誤り、自分の黄色のコンコードスを、もつと黄色い別の酒と見
誤まったのだ。だからコンコードスは最初から注文したとおり辻永
の前にあったのだ。彼は話をうまく持って行って、僕にコンコ
ドスを飲ませるつもりだったのに違いない」

「コンコードスの事をまだ云ってるの。——辻永さんはどこへ行っ
たのでしよう。大丈夫かしら」

「うん——」私は返事に詰まった。このままにして置けば箱詰め
になる辻永だった。

「とにかく帰って一杯飲もうよ——」と、私はミチ子の手をとつ
た。いま地獄街道を蝙蝠こうもりのような恰好でヒラリヒラリと飛んで
ゆく彼の姿を着さかななに一杯飲みながら、さて助けてやろうかやるまい

かと考えるのも悪い気持ではなかろうと謂いうものだ。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三二書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「モダン日本」

1933（昭和8）年9月号

入力：tatsuki

校正：土屋隆

2004年5月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

地獄街道

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>